

小學校教科書研究會編纂

尋常
小學讀本字解

第四學年後期用

小學校教科書研究會編纂

尋常
小學讀本字解

第四學年後期用

は じ め

新讀本が発行せられましたから、その解釋書がたゞさん

出来ましたが、多くは杜撰のそしりを免れない。

假名遣の誤りや、解釋の穩當でないものなど、完全なも

のは殆どありません。著者はこれを遺憾に思つて兒童を

本位として、此の字解を試みたが、こゝに殆ど完全に近

いものが出来ましたから出版することにしました。

明治四十四年三月十二日

編者しるす

尋常小學讀本卷八の字解

第一

皇大神宮

代々の天皇天子サマ。

きはめてク。

國民國ヂユウ

シママテノア
ヒダナイフ。

かならずキツ

伊勢。

参拜オマ井

心がこころ

ものなし。ツネニ心ニ思フテ井
ナイモノハナイ。

諸子ミナ。オマ
ヘダチ。

かくばかりコノヤ
ウニ。

いはれを知れりや

井マスケチシツテ

神代。

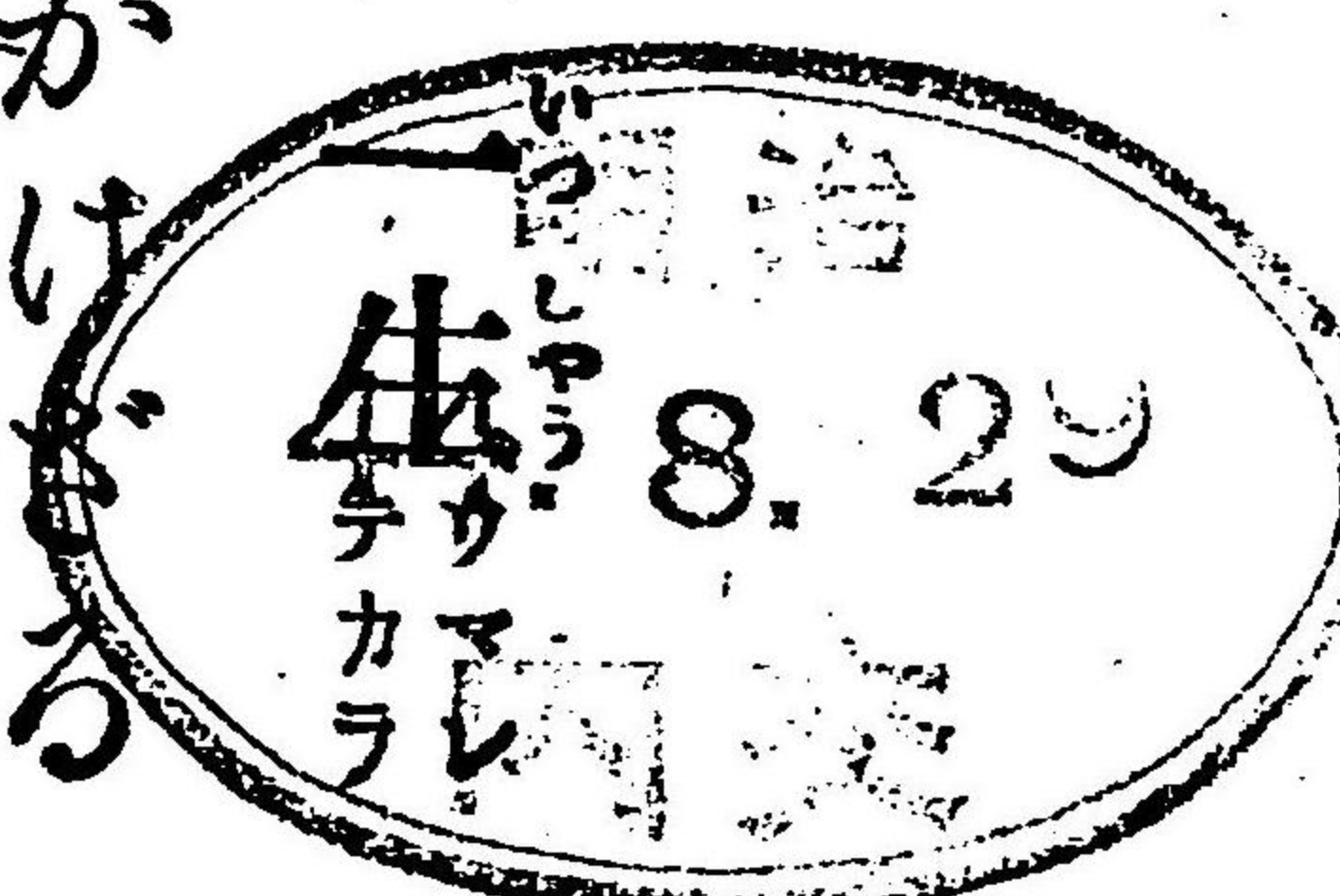
皇祖天子サマノ

降

し。八咫鏡を授け。

神勅カミサマノオ
ホセ。

あがめたまひし



か ヒマシタガ 神カミ殿サマノ 川カハ上カミノハカミ 造つくり。御ミ鏡カガミ。御ミ

神カミ體タマ。白シラ木キ造つくり。御ミ定サダメ。承うけたまはる。祭さい日じつリビ。勅ちよくし使し天子テンノサ

差さ立たて。皇くわう室しつ天子テンノサマノ。國こく家か日本ニッポンの。大だい事じあれば、かな

らず告つげたまふ。オホキナエライデキゴトガアル。戰せん役やくイクサノコ。天てん皇かう

陛へい下か。平へい和わ又ヨリナカガヨクチサマルコト。御おん式しきの盛さかんなること前まへ

古ふるたぐひなかりきと申まうす。ソノオンシキノリツバデイキホヒノアツタコト

ス。イママデニクラベヤウガナカツタトマウシ

第 二、 參宮日記の一節

夜や中ちゆう。うららかなる天てん氣き。日ひの丸まるの旗はた。

御み山やま木ぎ細さい工く。具ぐ細さい工く。左さ右う。戰せん利り品ひん。記き

念ねん砲ほう身しん塔たふ。へたらんか。老らう木き。

神かみ々がらし。いばん方かたなし。

御おん馬うま屋や。板いた垣がき御おん門もん。千ち木ぎ。質しつ素そ。

かしこくかたじけなし。とこしへにマイツ

モナガク。ヒサシク。とこしへに民安かれといのるかな我が世

を守れ伊勢の大神。伊ツイツマテモナガク日本ノ國ノ人が安心ニ平和ニクラシテ行カレルヤウニトイノルヲイ。ドウツ伊勢ノ大神ヨ、ワ

ガチサメテ井ルコノ世チオママモリクダサイマセ。御製天子サマノオヨミナ外宮。年來ののぞ

みマヘマヘカラ。幸シアハ

第三、 たげがり

秋の日の空すみわたり。秋ノ日ノ空が青々トヨ。風暖にさても

よき日や。風ハアタカクテサテ。山遊。來よ。いざ裏山

にきのこたづねん。サアウラノ山デキノコ。深く。たどり行

く細路づたひ。細イ路チツタツテアチラコ。かをれり。ニホウテナル。ヨイ

根木ノ呼ぶ聲。いでや。えもの數へん。サガシテトリタル。サガシテトリタル

セウ。たげがりのいさをくらべん。タケガリニ、タレガイチパン、テガ

第四、 寫真をおくる手紙

差上げ。笑つて。寫つて。まじめ。過ぎ。顔。伯

母。同じく返事。實にウニト。しばらく。髪。段

々。似て。時分ト。そつくりマ。急キ。参りガルコト。ア

第五、働クコトハ人ノ本分

度々鳴イテ。臺所。朝飯。商賣アルコト。用向ヨ。新

聞屋。牛乳。配達ル。大工。左官。石屋。仕立屋。

道具ヲ持ツ。メイメイツ。農夫。授業。役所。

會社。事務シ。練兵場兵士イロノケ。旅人ト。停車場。

急グ。職業ト。食物。着物。幸福シ。産ミ。樂。

却ツテ。苦シ。本分ナケレバナラヌツトメ。セ

第六、松下禪尼

北條時頼。招待セントテ。障子ノ破レ。

ススケタル。ツクロヒナタリ。義景。

召使。心得。ソレニ命ジタマヘケナサイ。イヒシニ

オボツカナキ手ツキ。一間。張

サラバコトク。給へ。切張。總

ベテオシナ若わかキ者もの。カクスルナリ。コノヤウニス心正こころただシ

ク心ガマツ節儉せつけんツシマ。天下てんかヲサメ日本ノ國ヲ養やしなハレ。ヨル

ナルベシヨツタノテアラウ。

第七、白雀しろすずめ(一)

昔むかし西洋せいやう。畑はたけ。何なに不足ふそくなく暮くしてぬた農夫のうふトオモウタコト

モナクアンラクニクラシテ近所きんじよ。身代しんだい。減へり。財さい産さんイシンダダ。親類しんるい。

心配しんぱい。野原のほら。坐すわつて。世間話せけんわなしヨノ中ノイロイ飛とんで。作さく

物もの田タ畑畑ニツクツ荒あす。之これ。雀すずめのせいスズメノス。實じつ際さいウホント顔かほ

附つき。問返こひかへし。仕合しあはせ。若もしト。たかつてタクサンア。此こ

の。其その。

第八、白雀しろすずめ(二)

屋敷やしき。影かげ。歸かへつて。様やう子す。下男げなんノメシツカヒ麥むぎ俵たばら。裏うら

門もん。水車場すいしやば。居酒屋ゐざかや。酒代さかだい代サケノ金カネ。借かり。其そのかたツノカ

驚おどろいてシテ。下女げにょノメシツカヒ隣となり。主人しゆじんの目めをかすめて

主人ノ目チ
ヌスンデ。牛乳。成程。朝ね程。損。呼起し。必ずツキ
ト。一週間七日ノア取返す。晝。御恩。一生。忘れ。
握り。

第九、ワザクラベ

百濟川成。畫工。世ニ聞エタル大工アリ。世ノ中ニツノ
ツテナル名高イ大工ガアリマシタ。堂。寺ノヤザナ大キ
建テ。繪。四角四面。四方ガマツ
戸皆開キタリ。戸ガミナアイテ。閉ヅシメル。幾度ナンドモ。工。

笑聲。數日ノ後。度キ。御出。音ナヘバト
サ。サラバトテイツレテハト。臭氣鼻ヲツクガ如シ
腹。恐ル。コハ如何ニ。コレハドウダトビツ
ホヒガスルヤ。ウデアアル。モチノコト
バデアアル。

第十、かぢ屋

僕。近所。老人。每朝。弟子。相手。仕事場。
釘。鎌。きたたへ。カネチスミ火ニヤキテヤハラカクシテ、
頼んだ。翌

日ヒツノアケル日ヒツ。ソ 暮方くれがた。小刀こがたな。元もと。大太刀おほだち。小こ

太刀たち。カダナノチヒサ。武士ぶし。清めてきよめて。一心不亂いっしんふらん。小こ

ズ一ズ生ケシ。何時いつ。丈夫ぢやうぶ。去年きょねん。奉公ほうこう。晚ばん。

第十一、花ごよみ

福壽草ふくじゆさう。黄金こがねの色いろの暖あたたかく。梅うめが香か

にに。ひなの祭まつり。三月三日さんがつさんじつノセツクノマツリ。桃ももの花はな。ほころび

そめてサキハツ。櫻さくら。梨なし。皆みな一時いつとき。紅白こうはく。野のべも山やま

へも新緑しんりよくの風かぜに藤波ふぢなみさわぐ時とき。新緑しんりよくの風かぜ。草木さうぼくがメチダシテ青々トア

藤波ふぢなみ。藤ふぢノ花はなアサチイフ。野山のやまモ草木さうぼくガ青々トシテ、ソノ上うへチフキツタ。垣根かきね。から

むマキツ。朝顔あさがほ。白蓮びやくれん。卷葉まきはをもるるつゆ涼すずやし。マキハ

レレル。ツユガズシイ。ツユチボロボロトコボシナガラフ。月見つきみのころ。アキ月見つきみチスル

口月くつきガマンマルニナツタトキ。中なかにも君きみの千代ちよ八千代やちよ祝いはふや菊きく

の花はなの宴えん。菊きくの花はなの宴えん。九月九日くがつくじゅうじつノセツクノサカモリ。千代ちよ八千代やちよ。千代ちよ八千代やちよ。千代ちよ八千代やちよ。千代ちよ八千代やちよ。

サマノオントシガ千年せんねんモ萬年まんねんモイツマデモオツ。ツキナサルコトチイハヒタテマツルノデアル。

第十二、マツチ

價あたい。便利べんりノヨキナイフ。

少すくなカルベシアラクナイデ

平生へいせいシン。

思し

ハザレドモオモハナイケレドモ。

今更いまさら。

驚おどろカ。

製造場せいぞうじやうトコロ。

手て

數すう。木材もくざい。湯氣ゆげ。

頭かしらニ藥くすり。

木片塗もくへんぬル、

等らうナド。

何なん

十人じふにんノ人手ひとでヲ要えうスルカヲ知しラズ

ナルカヲ知しラズナルカヲカラナイ。手てガカ

之これヲ

思おもハバ之ヲオモツタナラバ。

使つかフベカラズツカツテハイケナイ。

凡おほそオホカ

發はつめい明カヘダス

輸こ入こ品せふひん外ぐわい國こくカラモツテ

内地ないち新しん領りやう地ちトケベツスルタメニツカ

輸しゆつ出しゆつ外ぐわい國こくヘツ

一いち千せん萬まん圓えん。重ちゆう要えうモノナル

第十三、火くわ事じ

遠とほく。散ちつて。

弓張ゆみはりチンノコト。

後あと。

飛とんで。

火元ひもと。

裏町うらまち通とほり。

材木屋ざいもくや。

拔ぬけ。

角かどノ吳服屋ふくや。燒や

火ひノ勢いきほひ。隣となり。

火事場くわじば。

今こん夜や。

仕合あはせ。風上かざかみ。叔おや

父ちち。下火したび。

四五十戸よそご。土藏つちぐら。

二棟ふたばね。

役場やくば。

幸さいはひニハセ

一いっ切さいノコラズ。

書類しよるいガオホヤケケノ手て

記き録ろく類るいイイロイノコトチカイ

無なく。

食物。種々の工業。

利用。マクモチヒルコト。

有用。イリヨ

多

分。十ノモノナラ八九

煙草。

一服。

實に恐ろし。

取扱

大

切。ツダイ

第十四

電報

伯父。父母ノ兄

近年。チカゴ

誰か。

今朝。

新聞。

御安心。

返事。

長過ぎる。

短く。

焼く。

昨夜。

御存じ

ナサレ

一音信。

和田。

頼信紙

電報ヲタノムノニツノモンクチ
紙ヲ頼信紙トイフ。

第十五

藤原鎌足

皇極天皇

第三十五代ノ天子サマ。

御代

ツノ天皇ノチサメテオイ
デニナルトキチイフ。

勢ヲホシイマ

共ニイッシフル

マニシテ

イキホヒガエラクアツタカラジブンガカツテキマ
マナコトナシテ。ホシイママカツテキマ。

共ニイッシ

フル

マヒ

ウレヘテシンバイ

此ノ頃

アノ

皇子

天子サマノオ
子ノコト。

人トナリ

ツキ。

大事ヲ成ス

國ノタメニ大シ
ゴトナスル。

未ダ近

ツキ奉

ル折ヲ得

ザリキ

マダ皇子ノオソバニヨル
コトガデキナカツタ。

参リ。

拾ヒ。

ヒザ

マヅキテ

クコト。親シ

ミ

同志ノ人々

ヲ

カタラヒテ

イルカチホロボサウトイフオナシ心
ナモツテナル人々トハナシアツテ。

サル程ほびサウシテチ
ミツ

ギネン

参内さんだい天子サマノゴテ
ニ上ルコト。

アラカジメツマヘモ

以テ。大極殿たいごくてん

テウテイノ大禮たいらいヲ行
ハセラルルゴテン。

侍スじオソバニヒカヘ
テチルコト。

宮門きゅうもんヲ閉チサセオミヤノゴモンチ
オシメサセラレ

弓矢ゆみや

御前みまへ天子サマノ
オシマヘ。

三韓さんかんノ表文へうぶん
三カンカラ日本ヘ
ダテマツツタ文。

手ワナナ

キ手ガアルフルサテ。

アヤシミテフシギニオ
モツテ。

何故なにゆへゾドウイフ
ヲケダ。

討ツうちスコロ。

恐おそレ。

タメラハバガズグズシ
テ井ダラ。

肩かたツヒニシマヒニ
トウトウ。

殺サころ

レ。自殺じざつシブアンテシ
ヌコト。

天皇てんのうノ位くらみニツキ給フ
タマフ

天子サマニオナリ
ナサイマシタ。天てん

智天ちてん皇おう

第三十八代ノ
天子サマ。

即チ。此ノ御方おんかた。

功アリシカバテガ
ラガ

アリマシ
タカラ。

藤原ノ姓せいヲタマヘリ
フヂハラトイフメウシ
チクダサイマシタ。

一門いちもん一家いっか

第十六 鳥

大空おほぞらを飛とび。食くらふ。

氣候きこうサムサヤアツサ
ナドノモヤウ。

總すべべてタイガイ
オホカダ。

七面鳥しちめんてう。

陸上りくじやうをかの

水上すゐじやう。

鶴つる。

はぎヒザヨリ下。スネ。

駝だ

鳥てう。

鳥類てうるいカマノナ

卵たまご。

子供こどもの頭あたま。

必要ひつやう。

首くび併しかし。短みじか

く。

水鳥みづどり。

圓まるく。

陸鳥をかどり。

ことに鋭すまじくてイツソウイキホヒ
ガエラサウデ。

最も恐るしげなのは 割合。山鳥。扇形。座

敷。天井。

第十七、近江八景

似たり。湖。水の面。あかぬながめ

(一)ノ歌ハ琵琶湖ニ入ツノ景色ノヨイ所ガアルトイフコトヲヨシクシテアル。スナハチ、一、ビハノ形ニニテナルトイツテビハコトイフ名ヲモツタ湖ノ水ノ面ハチヤウドカガミノヤウニシツカデアツテコノ湖ノ景ニ見テモ見テモ見アキノセ。瀬田の橋。栗津。色はえて

(二)ノウタハ瀬田ト粟津ノコトヲウタツテアル。スナハチ、一、マツワタツテ見ヨウ瀬田ノ長橋ガ入日ドケサウデアアルワイ、シツカニユツタリシテ井ルワイトイフコト。雲をさまり

てイママデ出テ井タクモガド。かげ清し。ツキノカゲガウツクシイ。高ね。高い山

暮の雪。フエノユフケ。(三)ノ歌モマタ石山寺ノ秋ノ月ノ景色ト比良ノ雪トチヨシダノデア

カゲハコトニウツクシクマコトニヨイナガメデアアル。春ニナラヌノ花ガ咲。堅田の浦。

浮御堂。ふざい。オモムキ。(四)ノウタモマタ唐崎ノ松ト堅田ノカリ(かん)トノ景

色が最モヨイト人々ニモテハヤサレテナル。堅田ノ浦ノ浮御堂ノホトリヘ列ナツク。連れ。

矢走。白帆。夕風。聲程近し。トコエガタイツウチカヒ。走ヲサシテ

カヘツテ行ク舟ノ景色ト、三井寺ノ夕暮ノカネガ湖ノ面チツタハツテ行クアハレナ景色トノ二ツ
チ一ツニシテヨンデアアル。夕暮ニ白帆チアゲタ舟ガ三ツ四ツウチツレテ矢走チサシテカヘツテ行
クツノトキニ三井寺ノクレンノカネガ夕風ニフキオグラレナガラシツカナ湖ノ面チツタハ
ツテトホクチカクキコエルアリサマハイフニイハレヌ景色デアアルトイフコトナリ。

第十八、木綿着物ノ由來

由來。造り。機。綿。機械。種ヲ蒔ク。初頃。實ガ熟シマスミガアカラ。取去ル。紺。淺黄縞。染メ。藍。葉。莖。刈取ル。藍玉。汁。白布。シロイモメンノキ。

第十九、手紙

謹んで。取分け。一週間。祖母。涙。熱。心。配。昨朝。食事も進み。一先安心。併し。老病の事故。孫。御座い。勝手。御願。淺吉。御主人様。都合。看病。僅か。井上勉藏。淺吉殿。

第二十、胃と身體

いふやうに働けるに 汝へ坐して食ふの

みにて 報ゆ 止むべければ 左様の

心得。過し食堂。暗み。なえて 皮膚の

色。曰くニハ。諸君。職務。血の製造場

全身を養ふ。如何にして 數日間

送らざるが故に 自ら苦しむにいたれり

招く。誤れる 勞したりといはん

親密に暮すべし 相持 成

程。 感心

第二十一、 虎ト猫

猫デナイシヨウコニ竹ヲ書イテオキ

ノダト昔カライヒキタツテチル。ソコテヘタナエカキガ虎チカクト猫トマチガヘラレルカラ、マ

最モヨク相似タル獸ナリ 他ノ獸類

之ヲ運ビ去ルニ便ナリ 一撃 曲

レル爪。牙。肉ヲサクニ適ス。舌。裏。步。

ムク。他獸。急。飛ビ。捕フ。甚ダ多シ。

虎ハ一樣ナリ。トヲハヒトイロデア。トヲハ毛イロハミナオナシコトデア。

第二十二、世界の話

大日本帝國。大陸。島國。港。進み行かば。

凡そ。合衆國。農業。工業。商業。甚だ富めり。

都會。農船。首府。オホキナ市ヤ町。アキナヒノシナモノチツ。

人口最も多きところなり。人口最も多きところなり。人口最も多きところなり。

藝。イロイロカンガヘテ手ヤキカイチモツ。美術。カンガヘチツヒヤシテ人ノナグサミノタメ。

發達。隣國。學問。東部。領地。印。ヒラケス。クニ。ノ。ガ。ノ。チ。

度。支那。鐵道。歸着。地中海。印度洋。越。シ。ナ。カ。ヘ。リ。ツ。

え。出發點に遠ざかるべきはずならずや。出發點に遠ざかるべきはずならずや。

ホクナツテ行カネバナ。ラヌハズデハナイカ。

第二十三、世界の話

我等私。地球。表面。陸。南北。兩半球。北

半球。南半球。陸地。時候全く相反し。蝶の飛

リサカサマ。百花咲きみだれ。北極。南極。寒

ふ。時節。散りしきて。北極。南極。寒

冷。能はず。土人。氷雪。布

片。大部分。折節。山川の風景もうるは

し。人類。總數十六億。皮膚

カハ。髪。眼の色。目ノイ

第二十四、橋中佐(一)

戰役。名譽の戰死。廣瀨中佐。軍神

マ。皇太子殿下。御附武官。日頃。御信任

シテオモチヒ。大隊長。出陣。部下。勢銳

ク進撃シタ。幾重モノ陣地ヲ布キ

グサチスルバシ。盛ニ彈丸ヲ打出ス。シバシ

ハスヨシノ敵ヲ斬リ殺シ。傷。ヒルマズ。山上。
 追拂ツテ。國旗。大砲。堅ク。身ハ鐵石デナイハ
 テツヤ石。砲彈大砲ノ軍曹。内田清一。前面ノ敵ガ前進
 シテ來マス。マヘノ方ニナルテキガコナラ。退却
 ト。中佐ハ聲ヲハゲマシテ。中佐ハイサマシイ。御誕生
 日。セツカク占領シタ陣地。ホネチナツテウバヒトツ
 右肩。倒レタ。コケタ。コ

第二十五

橋中佐(二)

呼ブ。彈丸。腹。胸。打抜イタ。投ゲ。ユメウ
 ツツ。朝風。正氣ツイタ。敵ノ突撃ノ聲
 ガ盛ニ聞エル。取返サレ。残念。軍
 刀。杖。立上ラウ。面目。多數ノ部下。殘
 念千萬。重傷。馬丁。言付ケ。
 夜明頃。砲聲。銃聲。見事ニ。苦戰

アヤフイ 死體シタイシガ 積ツリ。 絶タエ。 ヨロメキヨロヨロシテ 後方ゴウホウ
イグサ。 勇氣ユウキイサマシ。 平生ヘイセイカラノ 行ユクザ、オコナヒ。

第二十六、名古屋

東海道。 旅行中。 衆人シウジンノヒト。 富士山。 名古屋城。

凡そ。 諸大名シヨダイミヤウに課カして 多クノ大名ニ 名城メイジヤウシロ。 天守閣テンシウカク

シロノウチニアルイチ 遠トホク數里スウリの外ソコよりも望ノゾみ見ミることを

得ウべし 五イ六ロ里カモトホクヘダツタトコ 平野ヘイヤの間マラノアヒダ。 四通八シツフハツ

達タツの要路ヤウロにあたれるを以て 四方シヤウニツウツ八方ハツパウニダツテナル。 ツマリ

ニアタツテ 大都會ダイゴクワイガホキイ 開通カイツウカヨウ。 商工業シヤウコウの發達ハツタツ著シユし

く 商業シヤウヤ工業コウギヤクガメダツテ 燒物ヤキモノ。 塗物ヌリモノ。 扇アヒ。 綿絲メンシ。 織物オリモノ。 産サン

出シユツすこぶる盛サカンなり ツクリダスコトガダイ 戸口コもまた年々ネンネンに

増加ゾウカす 家ノカズモマダ 熱田アツタ。 海陸運輸カイリクウンの便益ベンイキ。 開ヒけ 海ウミ陸リク

方カタニモツチハコビオケルベ 産業サンギヤクの發達ハツタツは今後コンゴいよいよ著シユし

からん 工コウ、商シヤウ、農業ノウギヤクノサカンニナルコトハ、コレカラ 卷 八 終

明治四十四年八月二十日印刷
明治四十四年八月廿五日發行

定價金參錢

著者

小學校教科書研究會

京都市上京區二條通河原町東へ入樋ノ口町貳番目

發行者

清水幾之助

大阪南區東新瓦屋町二百二十六番屋敷

印刷者

梶原謙吉

大阪南區東新瓦屋町二百二十六番屋敷

印刷所

文社

不許複製



發行所
大賣捌所

京都市二條通河原町

大阪市北區東梅田町

寶盛

文文

館館

誠文館編輯所編纂

誠文館編輯所編纂
國定算術科便覽

尋常小學校用
定價金拾錢
郵税金貳錢

理想の兒童用書

特色

▲小學校の諸教科中教ふる者、並に教へらるる者の共に困難を感じるは、算術科に過ぐるものはあらざるべし、されば本書は兒童が算術科を學習するに必要なる理論を平易簡明に述べ、其の應用を自在ならしめんことを目的として多年教授上の實際に鑑みて編纂せるものなり、▲本書載するところの理論は本科研究上の基本となるべきもののみを集めて、見易き様に一々各題目の下に集めれば、算術科學習者は、これによつて學習上非常の便益を得べし、▲要するに本書は國定算術書兒童用に抵觸せざるのみならず、實に該書の缺陷を補ひて兒童の理解を助け器械的數量を表記して諸種の計算に利便を興ふるものなれば、算術科教授を有効にせんと欲せらるる教育家諸君に本書を國定算術書と共に併用せられんことを望む。

理想の兒童用書

誠文館編輯所編纂

新定理科圖要解

尋常第五學年用
尋常第六學年用

定價各金拾貳錢
郵稅各金貳錢

●袖珍ポケット形美本●密畫數拾個挿入

▲理科はなるべく實物を觀察して研究すべき性質の學問である。又さうせなければ確實な理科の智識はつかないのである。然し實物といつても一から十まで集めるさいふことは經費其他の點からしても一個人で出来ることはいそいで本科の研究は圖によることが一番得策である▲本書は其插畫を一々確な據りどころのあるものから採り兒童の程度迄よく考へて適當なる説明を加へてあるそして其題目は文部省で出來た兒童用書によりて編纂したのであるから家庭に於て理科の復習豫習をするのに非常に助けになるものである

特色